

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

薩摩 真介

【所属】(助成決定時)

同朋大学文学部人文学科 講師

【研究題目】

「近世イギリスにおける海戦支持の言説の政治・貿易政策への影響とその変容 —ジェンキンスの耳戦争を中心に—」

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、近世イギリスにおいて軍事力、とくに海軍力の行使による利益獲得という思想が、イギリスの政治や行政に与えた影響を分析することである。戦争により敵の財産を奪い利益を得るといった思想や慣習は近世ヨーロッパに広く見られたが、イギリスの場合、それは海戦、特にスペイン領植民地での海戦と結びつけられていた。海戦により経済的利点が得られるというこのような思想は、政治史家や海軍史家から「海洋派政策」と呼ばれてきた海戦支持政策の中心的な要素であった。この「海戦支持の言説」はエリザベス期のフランシス・ドレイクらの活躍に端を発し、近世を通してスペインなどとの戦争が起こるたびに浮上した。本研究ではこの海戦支持の言説のうち、1739年のジェンキンスの耳戦争の時期に現れたものに焦点を当て、この言説がどのように使われ、それが政治や外交・貿易政策にいかなる影響を与えたのか、言説の支持者とスペイン領貿易商との関係はいかなるものであったのかを検討した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、上述のジェンキンスの耳戦争期における海戦支持の言説の内容と影響を探るため、以下の手順で分析を行う。まず、関連する二次文献等を調査することで、ジェンキンスの耳戦争時の政治的・外交的背景についての知識を得ることに努める。次に、Eighteenth Century Collection Online (ECCO)などのオンライン一次資料コレクションなどを利用して、同時代に出版されたパンフレット、新聞史料などを精査することで海戦支持の言説の内容や特徴、スペイン継承戦争期と比べての変化を探る。次に、海戦支持の言説が現実にも与えた影響を調べるため、渡英し現地での文書館での調査を通じて手稿史料を中心とした一次史料を収集する。このようにして集めた一次史料を帰国後に整理、分析し、論文執筆のための準備を行う。最後に以上の分析をまとめたものを研究会、学会等で報告し、その後それを基に論文を執筆し、国内外の学術誌への投稿を目指す。

以上の手順に沿って調査をすべく、今回はまず初めに、1739年のジェンキンスの耳戦争、およびその後のオーストリア継承戦争についての文献、あるいは海上での掠奪行為に関する研究文献を渉猟し、背景知識の習得に努めた。次に史料調査の第一段階として、ECCO等を使い収集した、1738-40年にかけて出版された同時代のパンフレット類など、およそ35点を調査した。さらに海戦支持の言説の背景や言説

が現実に与えた影響を探るため、2014年7月24日から8月6日にかけて渡英し、現地での文書館での調査を通じて手稿史料を中心とした一次史料を収集した。今回主に調査したのは、英国図書館(British Library)とケンブリッジ大学図書館(Cambridge University Library)である。前者の英国図書館では、主として、当時の国務大臣であったニューカスル公爵の書簡を収めたニューカスル文書(Newcastle Paper)を、後者のケンブリッジ大学図書館では、当時の第一大蔵卿であったロバート・ウォルポールが所蔵していた文書を集めたチョムリー(ヒュートン)文書(Cholmondeley (Houghton) Papers)などの個人文書を調査した。

【結論・考察】(400字程度)

史料調査の第一段階として収集した1738-40年の間に出版されたパンフレット類を分析した結果、以下のことが判明した。博士論文で検討したスペイン継承戦争期の海戦支持の言説では、海軍遠征による対スペイン領貿易の基地獲得という経済的利点の強調が頻繁に見られたが、この時期の言説ではこれに加え、スペイン側による自由な航海や貿易権の侵害に対する報復が、スペインに対する海軍力行使を正当化する理由として繰り返し主張されていた。これは、フランスにスペイン領市場を奪われる危険があったスペイン継承戦争期と異なり、1730年代後半においてはイギリスは対スペイン領貿易においてアシエント貿易などを通じてすでに一定の地歩を固めており、その既得権益の保護が何よりも重視されていたことを反映しているのではないかと推察される。今後は英国図書館とケンブリッジ大学図書館で収集した手稿史料の分析をさらに進め、言説の背後の政治・経済的背景や、言説の現実の政策への影響などをより掘り下げていきたい。